

コイン 入門書



目 次

はじめに	3
1 コインの基礎知識	4
(1) コインの起こり	
(2) コインの素材	
(3) コインの形	
(4) コインの大きさ	
(5) ミントマーク	
(6) コインの状態	
(7) プルーフ・コイン	
(8) 再鑄貨	
2 コインの歴史とそのバラエティ	8
2.1 古 代	8
ギリシャ	
ローマ	
ビザンチン	
オリエント	
中国	
2.2 中 世	12
1 イングランド	
2 フランス	
3 神聖ローマ帝国	
2.3 近 代	13
1 神聖ローマ帝国	
2 イングランド	
3 フランス	
4 18世紀までのドイツ	
5 19世紀以降のドイツ	
6 ロシア	
7 アメリカ合衆国	
8 その他の国	
9 1800年以降	
2.4 現 代	21
1 戦中貨とインフレ貨	
2 通常銀貨の発行停止	
3 収集家向け記念貨の増大	
4 ミントセットとプルーフセット	
5 舂入物	
3 日本貨幣の歴史	24
○飛鳥時代	
○奈良・平安時代	
○平安後期・鎌倉・室町時代	
○安土・桃山時代	
○江戸時代	
○明治時代	
○大正時代	
○昭和時代	



はじめに

近頃、我が国でも記念コインが多く発行されるようになった。一方、金地金も低価格で安定しており、金貨が注目されるようになった。ところが、いざコインを集めようと思っても、初心者向けの手軽な入門書が無い。そこで、既存の書籍、雑誌の記事等を参考にこのような世界のコインの初心者向けガイドブックを書くことにした。

コイン収集はかつて王様の趣味であり特にエジプトの国王ファルークの集めたファルークコレクションが有名である。コイン収集はまた、世界各国への歴史の旅でもある。

数百年以上前のもので博物館にあるものと同じものが手軽な値段で購入でき、個人で所有して好きな時に好きなだけ手にとって楽しむことができるのはコインだけであろう。

この稿では、需要の高さと入手の容易さにより金貨に重点を置く。また、書くにあたって参考にした、多くの既存の書籍や雑誌の記事の著者にお礼を申し上げます。



第一章 コインの基礎知識

1、コインの起こり

西欧での、円形コインの起こりは、紀元前7世紀にエーゲ海沿岸イオニア地方（現在のトルコ西部）のリュディアで作られたエレクトラム貨である。このエレクトラムという素材は、河川より採取された金と銀の自然合金のことである。

一方、中国では春秋時代の紀元前5世紀頃より、布貨と呼ばれる農具の鋤の頭で形を模した青銅貨と、刀貨と呼ばれる小刀（なたに近い）の形をした青銅貨が作られている。



2、コインの素材

現在では多くの素材が用いられているが、代表的なものを取り上げる。

a) 金

貴金属の代表選手で古くから使われている。品位（純度）を916、900、500等で表す。これは全体を1000で現した比率で、それ

ぞれ91.6%、90%、50%となる。22金は916に相当する。

金は混ぜる素材に銀を用いると黄味がやや薄くなり、銅を用いると赤みを帯びる。

b) 銀

この素材も古くから多く使われている。酸化銅の黒さびが付くと、独特の味わいのある雰囲気を出す。このさびのついた状態をトーンと呼ぶ。純度は金と同様に表示される。我が国のかつてに鳳凰の100円玉（昭和32、33年）、稲の百円玉（昭和34～41年）に用いられている。また純度925のものをスターリングシルバーと呼ぶ。オリンピックの千円銀貨はこれにあたる。

c) 銅

定額のコインに使われる素材で、我が国の10円玉がこれである。数%の錫や亜鉛を加えた青銅として用いられる。

d) 白銅

銀の価格沸騰、工業需要の増大に伴い、銀に代わって用いられるようになった素材で、銅に数十%のニッケルを含む。我が国の50円玉以上の硬貨をはじめ、世界中の通常貨に用いられている。

e) その他

貴金属としては他に白銀（プラチナ）、パラジウムが用いられている。低額コイン向けには黄銅（真鍮）、アルミニウム、ステンレスなども用いられる。

3、コインの形

コインの形としては古くから円形のものが多いが、実際には様々な形のものがある。

円形以外の代表的なものを次に挙げる。

a) 七角形

英国を始めとする英連邦の50ペンス、20ペンス白銅貨で用いられている。盲人が手で触った感触でわかる形として、七角形が採用された。

b) 四角形

東南アジアの低額コインに多い。角に丸みをつけている。そのほとんどが正方形であるが、トンガには横が縦の約2倍の長方形のものもある。また欧州では17世紀頃より贈呈用コインとして、クリッペと呼ばれる四角形コインも造られている。

c) その他の角形

六角、八角、九角、十角、12角形のものがある。廃貨になっているが、イエメンに五角形のものがある。最近では金貨でも多角形のものが見られる。

d) ホタテ貝形

円形をベースに縁を波打ち形にしたもので、やはり東南アジアの低額コインに多い。

e) 穴あき円形

我が国では5円玉と50円玉が穴あきコインである。西欧では珍しいと言われているが、スウェーデンの25オーレ白銅貨、ハンガリーの2フィルスアルミ貨が現行コインとして存在する。かつてはフランス、ベ

ルギー、デンマークで多く使われていた。四角形の穴があいたコインはかつての中国、日本、安南（ベトナム）に限られるようである。金貨ではパプアニューギニアに穴あきのもので数種類ある。

4、コインの大きさ

コインの大きさに注目して分類する場合がある。通常コインの直径により次の4つに分類される。この場合、コインの厚さ、重量は考慮しない。

a) 小型

直径がおおよそ25mm以下のもの。

b) 中型

直径がおおよそ26～32mmのもの。

我が国のコインでは500円白銅貨、記念5000円銀貨がこれに当たる。

c) 大型

直径がおおよそ33～41mmのもの。

我が国のコインではオリンピック記念の1000円、明治期の一円銀貨がこれに当たる。

d) 超大型

大型よりも大きな直径のもの。

この分類が実際に用いられる時はコインの素材と組み合わせて、大型金貨、中型金貨、超大型銀貨、大型白銅貨などのように呼ばれる。

特に大型銀貨をクラウンと呼ぶ場合がある。これはかつて英国のコインにクラウンと呼ばれる大型銀貨があった為、これを代

表としたものである。

又中型以下の銀貨と、貴金属以外の素材のコインをまとめて、マイナーあるいはマイナーコインと呼ぶこともある。

5、ミントマーク

ミントマークとはコインの鑄造地を表すしるしである。ミントマークの違いによりコインの稀少度、価額が大きく違う場合がある。明治以降の我が国のコインは主に大阪の造幣局で作られているが、ミントマークはつけられていない。

通常アルファベットの大文字 (A,B,C など) が用いられる場合が多い。

以下、ミントマークを用いている代表的な国を挙げる。

a) アメリカ

現在は、“D” (デンバー)、“S” (サンフランシスコ)、無印 (フィラデルフィア) の3種であるが、かつては“CC”、“O”、“C”なども見られた。

b) ドイツ

西ドイツとしては、“D” (ミュンヘン)、“F” (シュトゥットガルト)、“G” (カールスルーエ)、“J” (ハンブルグ) の4種であるが、かつての統一ドイツ時代には“A” (ベルリン)、“E” (ムンデンヒュッテン) もある。さらに時代をさかのぼると“B” (ブレスロウ)、“C” (クレーブ) などもある。

c) フランス

現在ではパリミントの無印のみである。19世紀前半までは20以上のミントマークがあり、更に鑄造所の長官のマークがペアで用いられている。この長官マークにはチューリップ、ニワトリ、牛、蜂、ホタテ貝、ノアの箱舟といった様々なものがあり、非常に興味深い。

6、コインの状態 (グレード)

コインは本来流通を目的としたものであるから、流通の過程で傷や指紋がつき磨耗し、光沢が無くなる。これらの程度を状態 (グレード) と呼び、表示方法が何種類かある。

ここでは最も一般的なものについて英略記と日本語について述べる。

これらの状態表示は個人による主観的な要素もあり、業者により違った要素が付随する場合もある。次に特殊な状態表示について、いくつか例示する。

VF + … VF よりも幾分よい状態

EF - … EF よりも幾分悪い状態

VF/EF … 表面が VF で裏面が EF の状態

VF ~ EF … VF から EF の状態 (この表記は曖昧なので上記のいずれかで表記したい)

トーン VF … 銀貨や銅貨に用いられ、サビで前面が黒ずんでいる VF 状態

クリーン EF … 薬品でサビを落としたため、光り輝いている EF 状態



7、プルーフ・コイン

通常のコインとは別に、特別に用意した平金（コインの地金）と極印（コインのデザインを刻んだ元金）を用いて、丁寧に作られたコインをプルーフ・コインと呼ぶ。

このコインの平らな面は鏡のように光り輝いている。一方、肖像など絵柄の盛り上がった部分は光り輝かせる場合（ブリリアント・プルーフ）と、霜降り状態にする場合（マットプルーフ）とがある。

プルーフ・コインは17世紀頃より、贈呈用あるいは収集家向けに少数作られている。

最近では、記念コインの発行時には未使用とプルーフが発行される場合が多い。また、通常貨のセットではミント（未使用）セットとプルーフセットがある。

我が国でも昭和62年に、天皇在位60年の10万円金貨プルーフと500円から1円までのプルーフセットが発行された。また、通常貨のプルーフセットが銀等の貴金属で作られる場合がある。

一方、フランスでは16世紀より通常のコインの2倍、3倍、4倍の厚さのコインを贈呈用に少数造る習慣がある。このコインをピエフォー・コインとよんでいる。

1960年以降、通常の素材のものとは別に、金、銀、プラチナのものも作られており、ほとんどが2倍厚のピエフォー・コインである。



8、再鑄貨

後の時代に原極印を用いて造られる趣味用コインが再鑄貨である。

銀貨では1780年銘のマリア・テレジア・ターレルが有名で、これはかなり最近まで貿易決済にも使われていたようである。金貨ではオーストリア、ハンガリー、メキシコに多い。いずれにしても価額も割安で入手は容易なものが多い。再鑄貨には特別なマークがつけられる場合がある。

ところが、帝政ロシアのコインには、ノヴォデルと呼ばれる高価で素晴らしい出来の再鑄コインがある。これは18世紀の末頃にコイン収集家向けに17～18世紀のロシア・コインを少数造ったもので、特に大型銅貨が有名である。



第2章 コインの歴史とそのバラエティ

コインの歴史とそのバラエティをたどることは、まさに様々な時代の様々な国への旅である。登場するそのコインを所有し、好きな時に机の上に並べ鑑賞することや、思いにふけることが出来るのは贅沢の極みである。

2-1 古代



1、ギリシャ

コインの起こりで述べたように円形コインが初めて製造されたのは、BC7世紀のリュディアであった。以降ギリシャ本土を初め、地中海や黒海沿岸の各地でも発行された。

マケドニアのアレクサンドロス大王の東征に伴い、貨幣制度もメソポタミア、ペルシアやインドにも伝わった。

ギリシャ・コインは、中央の盛り上がった厚手のコインで、味わいのある不均一な形をしており、まさに古代の小美術品であるといえる。デザインとしては、アポロ、ヘラクレス、ニケといったギリシャ神話の神々や、カニ、ウサギ、ワシ、ライオン、イルカなどの動物が多く用いられている。

以下に代表的なコインのいくつかを記す。

- BC500年頃のペルシアのダリウス大王（BC521～456）の全身像を描いたシグロス銀貨（約5g）とダリック金貨（約8.4g）
- BCのリュディアのエレクトラム・ステータ貨（約14g）主にライオンを描く。
- アテナの頭像とふくろうのデザインの、あまりに有名なアテナのテトラ（4を意味）ドラクマ銀貨（約16～17g）BC500年頃

よりBC60年頃まで発行されており、年代によりデザインがかなり変わる。BC449～413のものが入手も容易でデザインも良



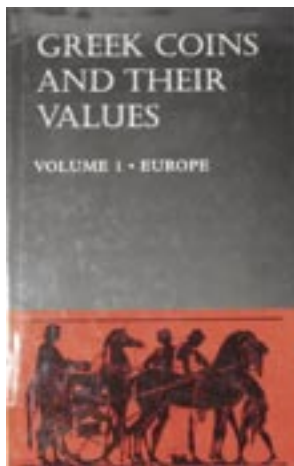
い。

- シシリー島のシラクサでBC400～300年頃発行された、クアドリガ（4頭立て馬車）とアトラーサ女神の頭像を描いたデカ（10を意味）ドラクマ銀貨（約40g）とテトラドラクマ銀貨。
- コリントでBC360～300年頃に発行された、ペガサスとヘルメットをかぶったアテナの頭像を描いたステータル銀貨（約8.5g）
- マケドニアのアレクサンダー大王（在位336～323年）時の、ライオンの皮を被ったヘラクレスの頭像とゼウスの座像を描いたテトラドラグマ銀貨とドラグマ銀貨（約4g）マケドニアは大帝国の為、発行地域により多少のデザインの違ったものが多数ある。同時期のアテナ女神の頭部とニケ立像デザインのステータル金貨（約8.5g）も有名である。



- プトレマイオス朝のエジプトでBC280～200頃に発行された、ゼウス神の頭部と雷電を踏みつけるワシを描いたアス大型銅貨（時代と額面により35～85g）
- 同じくプトレマイオス朝BC2世紀の女性頭像と豊穡の角（コルヌピア）を描いたオクタ（8を意味）ドラグマ金貨（約28g）
- 同じくプトレイマス朝のクレオパトラ（在位BC51～30年）の頭像を描いた銅貨

参考文献 「Greek Coins And Their Values」
全2巻 シーア著 1978年



2. ローマ

伝説によると、狼の乳によって育てられたロムルスとレムスという兄弟によって建国されたことになっている。ローマはBC6世紀末に共和政を敷き、BC3世紀の前半にはイタリア半島の全域を支配化に治めた。BC264～146年に渡ってカルタゴとポエニ戦争を行なう。BC60年にはカエサル（シーザー）、ポンペイウス、クラックスとの三頭政治が行なわれ、BC44年にはカエサルはブルータスに暗殺される。その後エジプトのクレオパトラがからみ、カエサルの養子のオクタ비아ヌスが、BC29年に元老院よりアウグストゥスの称号を得、帝政ローマが始まる。



ローマコインも共和政期のものはギリシャ・コインと同様の雰囲気を持ち、神話に登場する神々や動物が描かれている。次に代表的なコインをいくつか記す。

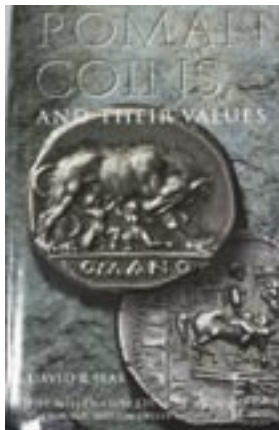
- アスと呼ばれるキャスト（鋳型）製の大型青銅貨（最大のもは約1100g）は、時代と共に小型軽量化していく。2つの顔を持つ神であるヤヌス神の頭像と船のへさきを描いたもの（最大のもは約320g）が有名である。
- ジュリアス・シーザー（在位BC59～44年）の頭像をデザインしたデナリウス銀貨（約3～4g）は高価であるが、ゾウをデザインしたものは比較的入手が容易である。
- オクタ비아ヌス、即位後の呼称アウグストゥス（在位BC27～AD14年）のデナリウス銀貨は比較的入手が容易である。

- ネロ（在位 AD54～68年）、五賢帝のネルヴァ（96～98年）、トラヤヌス（98～117年）、ハドリアヌス（117～138年）、アントニヌス・ピウス（138～161年）、マルクス・アウレリウス（161～180年）のデナリウス銀貨、セステルテウス青銅貨（約20～30g）も、ネルヴァを除き入手が比較的容易である。アウレリウス金貨（約7g）は稀少で高価である。



- コンスタンティヌス大帝（在位 337～361年）のアス青銅貨（約3g）も入手が可能である。

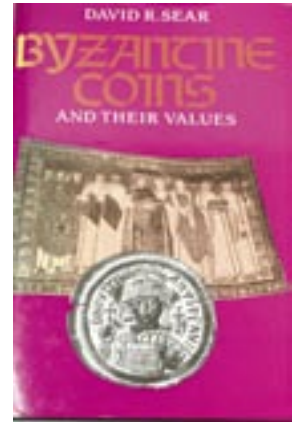
参考文献 「Roman Coins And Their Values」
全2巻 シーア著 1978年



3、ビザンチン

コンスタンティノープル（現在のイスタンブール）を首都とする東ローマ帝国をビザンツ帝国（ビザンチン）とよび、1453年にオスマントルコに滅ぼされるまで続いた。

ビザンツ帝国のコインは金貨と青銅貨が主で銀貨は極めて少ない。ソリダス金貨と呼ばれる量目約4.5g金貨は、歴代の皇帝全てによって発行された。一方、青銅貨はフォリス青銅貨と呼ばれ、時代と共に量目が軽くなり、デザインも宗教色が濃くなっていった。次に有名なコインをいくつかあげる。



- ユスディニアニス帝（在位 527～565年）の大型フォリス青銅貨（直径約40mm 約23g）
- 11世紀中頃のお椀形をしたソリダス金貨は皇帝の肖像とキリストの半身像を描く。



4、オリент

ヨーロッパの東に位置する、中近東からインドにかけてのオリент諸国の代表的な国について述べる。

a) パルチア

パルチアはBC250年頃、アルサケスI世（在位BC250頃～214年）によりカスピ海南東に起こった。スキティアの服装と帽子を被った独特の王の胸像の表面と、王の座像を持つドラクマ銀貨が発行された。ミトラダテスI世（BC170～138年）の頃よりテトラドラクマ銀貨も発行されるようになった。パルチアは226年にササン朝ペルシアに滅ぼされた。



b) ササン朝ペルシア

パルチアを破ったアルデシールI世（在位226～241年）は226年にササン朝ペルシアを起こした。以降642年にサラセン帝国に敗れるまで続く。

コインは歴代の王の肖像を描いた平べったいドラクマ銀貨（約4g）が中心である。有名なホスローII世（590～627年）のものは特に入手が容易で、美品を一万円前後で購入することが出来る。金貨としてはディナーナ金貨がある。

c) インド・クシャーン朝

インドでリシア王を滅ぼしたカドフィセスI世（在位45～77年）により、45年にクシャ

ン朝が起こる。カニシカ王（在位144～173年頃）の時に隆盛を極め、5世紀中頃に滅びる。コインでは、カニシア王のステータル金貨（約7g）と銅貨が有名である。この銅貨にはゴーマダ・ブッダを描いたものがある。

d) インド・グプタ朝

グプタ朝は、320年後にチャンドラグプタI世（在位320～335年）により、インド東部に起こった。次王のサンドラグプタ（在位335～337年）より、本格的な領土の拡大を行なった。コインは金貨が中心で、チャンドラグプタII世（275～413年頃）のステータル金貨が有名である。

5、中国

中国の古代には、鋤の頭の形をした青銅貨である布貨、青銅の小刀の形をした刀幣が発行されている。それぞれ形により幾種類かに分類されている。以下にそれぞれの概要を述べる。

- 空首布…最も古いタイプで上部に穴があいている。
- 尖足布…下部の両端が鋭くとがっている。上部は穴無し。
- 方足布…下部が方形の形をしている。上部は穴無し。
- 有耳布…上部の両端に耳のようなでっぱりがついている。上部は穴無し。
- 貨布…これは一世紀頃のもので上記のタイプより細形で、上部に穴があいている。入手は容易である。
- 方首刀…刀頭が方形をしている。入手は比較的容易である。
- 尖首刀…刀頭の左上部がとがっている。

- 反首刀・・・刀頭の左上部はとがり湾曲している。3,4,5文字の銘が入っている。
- 円首刀・・・刀頭の凸が緩やかな弧を描いている。

2-2 中世

前節の古代の後を受けて、大型銀貨の登場する1500年頃（国によって登場する時期が異なる）までを中世として扱う。



476年に西ローマ帝国は滅び、486年にクロヴィウスI世（在位482～511年）の下で、フランク帝国が起こる。8世紀後半には、シャルル・マーニュ（768～814年）が現れ盛栄するが、843年に3つに分裂する。それぞれフランス、イタリア、ドイツの下である、西フランク王国、中フランク王国、東フランク王国となる。

西フランク王国は987年よりユグ・カペー（在位987～996年）のより、パリに首都が移され、カペー朝（1328年まで）一方、中フランク王国（現在のイタリアあたり）はマジャール（ハンガリー）人に侵略されて後、東フランク王国（現在のドイツあたり）のオットーI世（936～973年）により合併され、962年に神聖ローマ帝国（ドイツ帝国）となる。

イングランドは449年のアングロサクソン族のブリタニア侵入により始まり、871年にはアルフレッド大王（871～899年）が現れる。

1、イングランド

イングランドのコインはアングロサクソン系の中期（755～780年頃）、約1.3gのペニー銀貨が登場する。これにはマンガ的な王の肖像が描かれているものとそうでないものがある。ノルマン系のウィリアムI世（在位1061～1087年）以降もペニー銀貨が主流である。ヘンリーII世（1154～1189年）あたりからのコインから入手が比較的容易になる。

エドワードI世（1272～1307年）の治世の1279年に4ペンスに相当するグロート銀貨が現れる。エドワードIII世（1327～1377年）の治世にコインのバラエティは大きく広がる。ノーブル金貨（直径約3cm, 8～9g）の登場であり、入手はさほど困難ではない。

エドワードIV世（第一期1461～1470年）にセント・ジョージが龍を退治するデザインを持つエンジェル金貨は（約5g）が登場する。チューダ家のヘンリーVII世（1485～1509年）の治世には、ソヴェリン金貨（直径約4cm, 約16g）が登場する。これには玉座に座る王の肖像と、中央に紋章を配置したチェダローズが描かれている。またこの時期にテストーンと言われるシリング（12ペンス）に相当する銀貨も登場する。この銀貨には写実的な王の頭像が描かれている。

参考文献「Coins Of England And The United Kingdom」シービー&バーウエイ著

ローマ時代から現代までのコインが取り上げられている。ほとんど毎年発行されており、このカタログの番号はS番号と呼ばれる。



2、フランス

王家がコイン製造を統括するようになったのは、ペパン短軀王（在位 751～768年）からだと言われる。この頃のコインはデニエという2g弱の薄い銀貨である。ペパンの次の王が有名なシャルル・マーニュ(768～814年)である。カペー朝になり、ルイIX世、つまり聖王ルイ（1226～1270年）は貨幣制度を制定し、楯の中に6つの百合を配したエキュ金貨（4g）と、12デニエに相当するグロ銀貨（4.2g、別名グロ・トゥルノワ）を発行した。

金貨ではジャンII世（1350～1364年）の治世に、フランカシュヴァルという馬上の騎士を描いた金貨（4g弱）と、羊を描いたムートン・ドール金貨（約6g）が発行された。シャルルV世（1364～1380年）の治世には、フランカピエという王の立像を描いた金貨（4g弱）が出された。さらに1420年頃に発行された英国王ヘンリーVI世の金貨であるサリュート・ドール（約3.5g）には、キリスト教の「受胎告知」の場面と英・仏の紋章が描かれている。

銀貨ではルイXII世（1498～1515年）になり、写実的な王の胸像を描いたテストーン銀貨（直径28mm、9.8g）が発行された。テストーン銀貨の最初の発行はイタリアミラノで1502年である。次のフランソワI世（1515～1547年）になると多くの種類のテストーン銀貨が発行され、入手も比較的用意である。さらに次のアンリII世（1547～59年）は貨幣制度を改革し、金貨ではアンリ・ドール（約3g）を発行した。

参考文献「Les Monnaies Royales Francaises de Hugues Capet a Louis 16」

1926年 シアニ著

3、神聖ローマ帝国

神聖ローマ帝国は英語による呼称であり、正しくは「ドイツ人のローマ帝国」である。

帝国の成立は962年のオットーI世（在位962～973年）の戴冠とされる。1273年にハプスブルグ家のルドルフI世（1273～1291年）が皇帝となり、1438年のアルブレヒトII世以降ハプスブルグ家の世襲となった。フリードリッヒIII世（1440～1493年）の治世にグロッシェン銀貨（直径約27mm、約2.5g）が発行された。

一方、ブランクティアートと呼ばれる薄手の片面打ち銀貨は、1127年に神聖ローマ帝国内のブランデンブルグで初めて発行され、以降ドイツの各地で造られている。

さらにイタリアのフィレンツェ（フローレンス）では、百合の花を描いたフロリン金貨（約3.5g）が1252年に製造され、各地に広がった。

2-3 近代

コイン鑄造での近代化は、大型銀貨の登場より始まった。ここでは、神聖ローマ帝国内のハル（チロル地方の都市）での大型銀貨の登場から、第2次世界大戦の頃までを扱う。この時代のコインは表面に王の写実的な肖像が、裏面には紋章が描かれているのが特徴である。この期間の大型金貨の参考書はダベンポート叢書、ヨーロッパ・クラウンに関する4冊とドイツ・ターレルに関するもの4冊（すべて英文）がベストである。1800年頃以降に関しては、クラウスのカタログ（電話帳）で充分である。



1 神聖ローマ帝国

フリードリッヒ三世(在位 1458 ~ 1493 年)の治世下、チロル地方のジギスムント大公(1477 ~ 1519 年)はハル造幣所にて、1486 年銘のグルディナー銀貨(直径約 40mm、約 30g)を発行した。これが世界で最初の大型銀貨であり、表面には大公の立像が、裏面には馬上の騎士が描かれている。次の皇帝マキシミアン I 世(1493 ~ 1519 年)はグルディナー銀貨だけでなく、メダルと銀貨の中間に当たるシャウ・グルディナーと 1509 年銘の世界最初の超大型銀貨、5 ターレル(約 118g)から 2 ターレル(約 56 ~ 61g)を発行している。

以降、スペイン王(1516 ~ 1556 年)でもあるカール V 世(1519 ~ 1556 年)、錬金術師でもあったルドルフ II 世(1576 ~ 1612 年)、いかりや長介以上に下唇の出たレオポルド I 世(1658 ~ 1705 年)、フランス革命期のフランス王妃マリーアントワネットの母でもある女帝 MARIA・テレジア(1740 ~ 1780 年)、最後の皇帝フランツ II 世(1792 ~ 1806 年)までの 16 人の皇帝と、7 人の大公が数百種類の大型銀貨を発行している。

1806 年には神聖ローマ帝国は崩壊し、母体はオーストリア帝国に受け継がれている。

上記のように初期の大型銀貨はグルディナーと呼ばれていたがフェルディナンド I 世(1512 ~ 1564 年)の物より、ターレルと呼ばれ、以降のドイツ大型銀貨の呼称となる。この大型銀貨のシリーズは実に見事であり、銀貨収集の最高峰である。ほとんどのコインは表面に皇帝、大公の胸像が、裏面には紋章か鷲が描かれている。

一方金貨では、16 世紀初頭までは 1 ゴールド・グルテン(約 3.5g)の小型金貨のみで

あるが、以降 1 デュカット小型金貨(約 3.5g)と、10 ちゅかつと大型金貨が発行される。

ジギスムント大公とマキシミアン I 世のグルディナー銀貨と超大型銀貨を除き、銀貨はそれほど入手が困難ではない。大型銀貨の参考書としては、上記のダベンポートのもの他に、フォーグル・フーバー著「Taler und Schantaler des Erzhauses Habsburg 1484-1896」(1971 年ドイツ語)がある。

2、イングランド

ヘンリー VIII 世(在位 1509 ~ 1547 念)は王妃を 4 回も変えたこと



で有名であるが、その病弱で幼折した息子、エドワード VI 世(1547 ~ 1553 年)の治世下の 1551 年に最初の大型銀貨、クラウン(直径約 42mm、31g)が発行された。次のメアリ I 世(1553 ~ 1558 年)の時に、大型金貨としてソヴェリン(直径 44mm、約 13g)とリアル(直径約 35mm、約 6.5g)が発行した。さらに次の女王エリザベス I 世(1558 ~ 1603 年)の治世下では、1601 年にクラウン銀貨が復活し、以降歴代の国王により発行される。

このエリザベス I 世のクラウン銀貨には、女王の胸像と紋章が描かれており、非常に人気のあるコインである。次のジェームス I 世(1603 ~ 1625 年)はスコットランドの紋が加わる。チャールズ I 世(1625 ~ 1649 年)の後には、クロムウェル(1649 ~ 1658 年)により共和政(コモンウェルズ)となり、共和政のシンボルの紋章のみで肖像の無いコインやクロムウェルの胸像を描いたコインも発行されている。

1660年の王政復古後には、チャールズII世(1660～1685年)の治世の1662年以降、今までのハンマー方式(職人がハンマーを用いて手打ちでコインを製造する方式)より機械方式に完全に変わった。そして、コインのフチの削り取りを防ぐ為に、大型コインにはフチに銘文をいれ、中小型コインはギザブチとした。

また、1622年はアフリカのギニアで生産された金地金を使用したギニー金貨が作られた。これには1ギニー金貨(直径約25mm、8.35g)、2ギニー金貨、5ギニー大型金貨(41.75g)がある。以降、1714年よりはドイツのハノーヴァーより王を迎え、ジョージI世(1714～1727年)からハノーヴァー家として続くが、18世紀の末までコイン発行に大きな変わりはない。

ジョージIII世(1760～1820年)の治世下の1797年には、スペイン王の肖像を描いた8リアル銀貨に、ジョージIII世の小型肖像をカウンターマークした緊急コインが出された。また、1797年には車輪銭と呼ばれる大型銅貨2ペンス(直径41mm、約57g)と1ペンスが出され、1804年にはバンクダラーと呼ばれる大型銀貨も出されている。1816年には金本位制度を施行し、1817年よりソヴェリン金貨が発行される。これには、1ソヴェリン金貨(直径22mm、約8g)、2ソヴェリン金貨、5ソヴェリン大型金貨がある。これらのソヴェリン金貨とクラウン銀貨の裏面には、今までの紋章の変わりにピストルッチがデザインしたセント・ジョージの竜退治が描かれている。

2代後のビクトリア女王(1837～1901年)の時代は英国が最も隆盛を極めた時代であり、

英連邦化の諸国も多く、たくさんのビクトリア女王を描いたコインが発行された。ビクトリア女王の人気とあいまって、コインの人気も非常に高い。銀貨では、ヤング・タイプと呼ばれる1944～47年に発行されたクラウンと治世10年記念である凝ったデザインのごシック・クラウンが有名であり、金貨では非常に高価であるが、裏面にビクトリア女王の立像とライオンを描いたウナ&ライオン5ポンド金貨が有名である。



1817年以降、デザインの優れた試鑄クラウン貨も沢山作られており、収集家を楽しませている。19世紀前半の英国コインは、世界のコインの頂点ともいえる。ビクトリア女王以降は、1920年に銀貨の品位が925(スターリング・シルバー)より500(50%)に下がり、通貨としての大型銀貨の発行は1937年が最後となった。

3、フランス

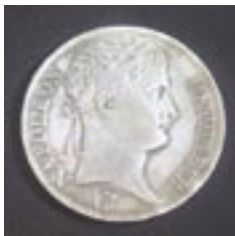
アンリIII世(在位1574～1589年)は、大型銀貨フラン(直径約38ミリメートル、約14g)とデミフラン(1/2フラン)を発行した。しかし、次のブルボン王朝の開祖であるアンリIV世(1589～1610年)の時は、フラン銀貨は発行されなかった。ルイVIII世(1610～1643年)の治世の末期に彫金師ジャン・ヴァランにより機械方式によるコイン製造に切り替えると同時に、大型金、銀貨が発行された。大型金貨としてエキュ銀貨(直径39mm、約27.1g)を始め、1/2エキュ、1/4エキュ、1/12エキュ銀貨も作られた。金貨としては、ルイドール金貨(直径約



25mm、6.7 g)を始め、1/2ルイドール、2ルイドール金貨も作られた。少数ながら超大型金貨、8ルイドール（直径45mm、約5.3g）や10ルイドール（直径50mm、約66.9g）も作られた。

ルイXIV世（1643～1715年）になると、72年という長い在位の間に20種以上のエキュ銀貨が出されている。表面の王の胸像も幼年像より老年像まで様々なタイプがあり、興味深く、入手も比較的容易である。ルイXV世（1715～1793年）はフランス革命により、ギロチンで処刑された王である。

フランス革命により貨幣制度は変わり、エキュは廃止となりフランが復活した。5フラン大型銀貨は品位900で25gと決められた。この5フラン銀貨にはディプレ・デザイン（自由と平等の女神を伴うヘラクレス）が描かれ、以降の共和政期にも同じデザインのコインが発行され続けた。一方金貨は、ナポレオンI世（1804～1815年）治世期に発行が再開され、小型金貨の20フラン（直径21mm、6.45g）と中型金貨の40フラン（直径26mm、12.9g）が出された。大型金貨は、ナポレオンIII世（1852～1870年）の時に、100フラン（直径35mm、32.25g）として発行され始めた。ナポレオンI世のコインはフランス・コインの中で最も人気があり、大型金貨の5フランと、20フラン、40フラン金貨が中心となる。これらのコインの表面には、ナポレ



オン頭像が描かれている。1803～1808年のものは、表面にナポレオン皇帝と書かれているにもかかわらず、裏面には共和国となっている。

参考書としては、ガドリー著「Monnaies Royales Françaises Louis X III -LouisX IV 1610-1792」（1986年、約650頁）と「Monnaies Françaises 1789-1989」（第9版、1989年、約540頁）がある。共にA5版で仏文である。

4、18世紀までのドイツ

1486年に神聖ローマ帝国内のチロルで発行されたグルディナー大型銀貨はドイツの諸地域に影響を及ぼした。1517年にシュリック伯は、ヨアヒムタール造幣所で大型銀貨を発行した。この造幣所の名称の後半部分が、ドイツ系の国々での大型銀貨の呼称、ターレルの起こりである。1520年頃よりドイツの各地方でターレル銀貨が発行されるようになり、特にブラウンシュバイク、マンスフェルト、ザクサンが多く発行している。1817年のドイツ統一の中心となったブランデンブルグ・プロイセンも注目したい。プロイセンの啓蒙主義専制君主フリードリッヒ大王（在位1740～1786年）のターレル銀貨には、高価ではあるが素晴らしいデザインの物が数点ある。

16世紀の後半から17世紀末にかけて、高額の超大型銀貨が、ブラウンシュバイクを中心に多く作られた。最高額面のものは、1588年にブランシュバイク・ヴォルテンビュッテルで発行された16ターレル（直径75mm、厚さ11mm、465.5g）である。直径が約10cmのものもかなり種類がある。また同時期に100デユカット超大型金貨（約400g）も作られている。

5、19世紀以降のドイツ

1806年に神聖ローマ帝国が崩壊後、1814年に35の公国・大公国と4自由市による連邦が結成された。1838年にバイエルンが中心となって、ドイツ及びオーストリア内での統一貨幣制度が制定された。そして、同盟1ターレル銀貨（銀分16.67g）、2ターレル銀貨（銀分33.41g）と10ターレル金貨、5ターレル金貨が造られた。特に、オーストリアを除いて92種に及ぶ2ターレル銀貨は、大きさ（41mm、ただしバイエルン記念貨14種は38mm）、重量感（約37g）、希少性より人気がある。

1871年に、プロイセンが中心となり、ドイツが統一されドイツ帝国となり、貨幣制度は制定され、マルク・ペニヒ（1マルク=100ペニヒ）となった。2マルク以上のコインはこれまでどおり、22の王国と大公国と2自由市で独自の発行が許された。5マルク大型銀貨（直径38mm、27.77g）は53種発行されており、表面は王の肖像で表面はワシを描いたものがほとんどである。銀貨は他に3マルク、2マルクがあり、金貨には20マルク、10マルク、5マルクがある。

第一次世界大戦後、1919年にワイマール共和国が生まれた。この時代では品位が500であるが、ワイマール記念貨と呼ばれる5マルク銀貨9種と3マルク銀貨19種が有名である。これにはプルーフコインも造られている。通常化としては1927～1933年の間発行された、表面に柵の木を面一杯に描いたコインが秀作である。

第一次世界大戦後のウェストファリア地方で、1921～23年にかけてウェストファリア

緊急貨と呼ばれるインクレ・コインが22種発行されている。素材はアルミニウム、銅、黄銅がほとんどで、全メッキしたものが多い。最高額面のものは、1ビリオン（兆）マルク洋銀貨で（直径60mm）で、コインの額面としては今でも最高である。

参考書としては、ターレル銀貨に関してはトゥーン著「Deutsche Taler Doppelgldem Doppltaler von 1800-1817」（A5版1979年約280ページ）がある。ドイツ帝国以降については、イエーガー著「Die Deutschen Munzen seit 1871」（新書版、1987年、約680頁）がある。

6、ロシア

ロシアでの大型銀貨の登場は、アレクセイ・ミハイロビッチ（在位1645～76年）の治世下に、発行されたルーブル銀貨である。このコインの表面には馬上の皇帝像、裏面には双頭のワシが描かれている。ピョートル大帝（1689～1725年）の時代になって、貨幣制度の改訂と新型の機械の導入により量産されるようになった。ルーブル銀貨は、皇帝の少年像を描いたものを始め、21種類発行されており、2ルーブル小型金貨も1718年に発行されている。中型金貨の10ルーブルはエリザベータI世（1741～62年）の時に出品されている。エカテリーナII世（1762～1796年）の時代には銅貨の整備が行われた。有名な銅貨としては、シベリア地方で発行された楯の両側にテン（狐に似た動物）を描いた10カペイク大型銅貨（直径約77mm）がある。また、ロシアにはノヴォデルと呼ばれる再鑄貨があるが、これはエカテリーナII世の末期頃に以前に発行されたコインを少量再発行したものである。ノヴォデル・コインは打ちが

良くなり高価であるが、大型銅貨は比較的入手しやすい。

ニコライ I 世(1825～55年)の治世下では、1828～35年にかけて世界最初のプラチナ貨である3、6、12ルーブルが発行されている。12ルーブル・プラチナ貨は直径35mm、約41.4gで希少性が高い。また、1834年からは記念ルーブル銀貨が発行されるようになり、1914年まで続いた。大型金貨としては1876年、1896～1910年に25ルーブル(直径約34mm、約32.3g)が1902年に37.5ルーブルが出されている。1917年にロシア革命により、ソヴィエトに生まれ変わる。

7、アメリカ合衆国

アメリカ合衆国は1776年に独立をした。1792年に貨幣制度が制定され、1ドル(=100セント)が定められ、1794年に1ドル銀貨(直径40mm、26.96g)が発行された。銀貨としては1ドルのほか、1/2ドル、1/4ドル(クォーター)、10セント(ダイム)、5セント(後に素材がニッケルに変わる)の5種類である。



金貨は10ドルに相当するものをイーグル(英語でワシ)と呼び、イーグル、1/2イーグル、1/4イーグルが発行され、1894年より20ドルに相当するダブルイーグル金貨(直径34mm、約33.4g)と1ドル金貨(直径13mm、1.672g)が発行された。米国の通常金、銀貨のほとんどのものには、自由の女神と白頭のワシが描かれており、時代と共にデザインが変わるが、いずれも優れている。1878～1921年に発行されたモルガン(デザイナーの名前)タイプの1ドル銀貨

(直径約38mm、26.73g)は年号別収集の対象となっている。1873～1885年にかけては極東貿易の決済を目的とした貿易銀(直径約38mm、27.22g)も発行されている。

1892～1952年にかけて1/2ドル記念銀貨が48種類発行されている。他の記念貨としては、1893年のイザベラ・クォーター、1900年のラファイエット・ダラー、1915年のパナマ太平洋博記念の1ドル金貨、1/4ドル、イーグル金貨、円形と八角形の2種類の50ドル金貨が有名である。

銅貨としては、1793～1857年のラージ・セント(初期のものは直径29mm、約13.5g)と、以降のスモール・セントの内のリンカーン・タイプ(直径19mm、3.11g、1909年以降発行)が有名である。リンカーン・タイプの1セントは手軽な年号収集の対象となる。



参考書としては、ヨーマン著「A Guide Book of Limited States Coins」(B6版1989年約270頁)があり、通称レッドブックと呼ばれている。

8、その他の国

今まで取り上げなかった国は多く、コインも様々であるが、興味深い数カ国のみを取り上げる。



a) スウェーデン

1521年にグスターフ・ヴァサ(在位1521～60年)は、デンマーク王の下の連合王

国より独立してスウェーデン王国を設立した。1528年より大型銀貨を発行したが、1534年よりダーレルという名称になった。ヴァサ治世の後期の比較的入手しやすいダーレル銀貨の表面には王の半身像の下に紋章が、裏面にはキリストの立像が描かれている。

グスターフⅡ世・アドルフ（1611～32年）は三十年戦争の時ドイツに進撃し、戦死したことで有名である。彼のコインは本国のものよりドイツの占領地を出しているものの方が入手は容易である。次のクリスティーナ女王（1632～1645年）は、哲学者デカルトを家庭教師に招いたことで有名であるが、この時代に大型銅貨が多く造られている。変わったものでは、四角い大きな銅板の四隅と中心に刻印しただけのプレート・マキーが造られている。最大のもは、1644年の10ダーレルで35cm×61cmで20kgもあった。

b) スイス

スイスは、三十年戦争後の1648年に独立をし、以降各カントン（州）でコインを発行している。19世紀末から20世紀初頭にかけて発行された大型銀貨カントン・テラーは、発行数はそれぞれ数千枚であり、デザインも優れているので有名である。1848年にはスイス連邦となるが、この少し前の1842年より1885年の間に17種発行された射撃祭記念大型銀貨も人気がる。



ややメダリックな印象を与えるが、優れたデザインである。

c) オーストリア

1806年の神聖ローマ帝国の崩壊後、神聖ローマ皇帝フランⅡ世がオーストリア皇帝となり、オーストリア帝国が設立された。領土はオーストリアとハンガリーであるが、第一次世界大戦後、ハンガリーが分離独立した。初期の大型銀貨ターレルは神聖ローマのものと同様している。1854年の皇帝御成婚記念2グルテン以降の記念大型銀貨に、優れたデザインのものが多い。例えば、1857年のSLと船を小さく描いたトリエステ鉄道開通記念同盟2ターレル、1877年の大聖堂（カテドラル）を描いたクッテンブルグ鋳山再開記念2フロリンがある。

d) 中南米ピラーダラー

スペイン支配下の中南米において1732年より1772年まで発行された8リアル大型銀貨で、地球の東西半球を中央に左右にヘラクレスの柱（ジブラルタル海峡の象徴）を配したデザインを持つ。裏面は王冠をかぶったスペインの紋章であり、両面優れたデザインのコインである。メキシコのものが入手が容易で、ペルーのものも比較的入手が容易である。ボリヴィア、チリ、コロンビア、グアテマラのものほとんど見かけない。

9、1800年以降

これまでも、1800年以降のコインをとりあげているが、ここでは補足的にいくつかのテーマについて取り上げる。

a) 大型銀貨

ダベンポート・カタログでは、1800年以降の大型銀貨として、ドイツ以外の欧州 約 395 点、ドイツ約 475 点、アジア、アフリカ、アメリカ約 530 点のおおよそ 1400 点を挙げている。この中には珍品も多く、とても集めきれぬ物ではない。そこで一国一枚に限るとか、特定の国の全部や、デザイン注目して集めるなどする事になる。数千円で購入できるコインも多いので、クラウス・カタログで調べてみると良い。

b) 銅貨

最近では、中型以上の銅貨はめっきり少なくなり、我が国の 10 円硬貨とイギリスの 2 ペンス硬貨ぐらいではないかと思われるが、以前は非常に多く発行されていた。直径 4cm を超える超大型銅貨ともなるとロシア以外にそれほど無いが、入手が比較的容易なものに限っても、100 種類の大型銅貨を選び出す事は出来る。中型銅貨ともなれば 200 ~ 300 種類を選び出すのは用意である。

c) 中型銀貨

中型銀貨には、デザインも優れシリーズをなす物もいくつかある。また、大型銀貨（クラウン）では入手困難な物でも、同じデザインの中型銀貨では入手容易で安価な物もある。ここではいくつかのシリーズについて述べる。

- 北欧 2 クローナ銀貨（直径 31mm、品位 800、15g）

デンマーク 13 種（1875 ~ 1958 年）

ノルウェー 6 種（1875 ~ 1915 年）

スウェーデン 12 種（1876 ~ 1966 年）

- オーストリア 2 シリング銀貨（直径 30mm、品位 640、12g）

シューベルト、モーツァルト、ハイドンといった音楽家の肖像を描いたものを含み、1928 ~ 37 年に 10 種。

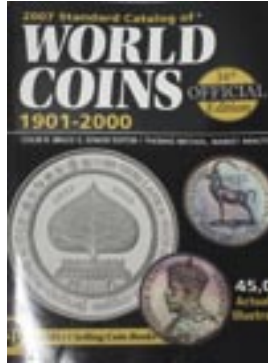


- イギリス 1/2 クラウン銀貨（直径約 32mm、品位 925/500、約 14g）

エドワード VI 世（在位 1547 ~ 53 年）より発行されているが、クラウンより割安であることと、発行数が多いので入手が容易である。また 1800 年代前半に、クラウンの裏面がピストルイッチの描いたセント・ジョージの竜退治に統一された時も、1/2 クラウンはその都度違ってデザインの紋章が描かれた点が特徴である。

2-4 現代

第2次世界大戦以降、素材が亜鉛や錫である戦中貨の登場からオンス物までを扱う。



(1) 戦中貨とインフレ貨

戦時中は、金・銀という貴金属が徴用され、銅も軍事使用されたため、コインの素材としては亜鉛、錫、鉄が用いられるようになった。アメリカ合衆国でさえ、1943年の1セントは銀貨である。第一次世界大戦時のものを含めて100種以上を選び出す事は容易である。他の素材としてはアルミニウムがあり、ハンガリーの5ペング(1943年、1945年)、モナコの5フランなど銀貨に変わって用いられるようになった。

一方、インフレ・コインとしては、ルーマニアの1946年の10万レイ大型銀貨が代表選手であろう。1941年に500レイであったものが、5年で200倍になったといえる。最高額面のコインとしては、前に述べたドイツのウエストファリア地方で発行された1兆マルク洋銀貨である。コイン以上に紙幣のインフレは甚だしく、ハンガリーでは1946年に1ビリオン・ミルペング(10の18乗、すなわち100京ペング)が出されている。

(2) 通常銀貨の発行停止

第2次世界大戦以降、各国で通常化としての銀貨が廃止されていった。おもな国の最後の通常銀貨をあげる。

- イギリス…1946年の6ペンス、1シリング

2種、フロリン、1/2クラウン

- フランス…1969年の5フラン、年金受給者向けの銀貨としては10フランが1971年、50フランが1980年、100フランは1990年時点でも発行されている。
- スイス…1969年の5フラン、1967年の2フラン、1フラン、1/2フラン
- アメリカ合衆国…1969年の1/2ドル、1964年の25セント、10セント
- カナダ…1967年の1ドル、50セント、25セント、10セント
- 日本…1966年(昭和41年)の100円

(3) 収集家向け記念貨の増大



通常銀貨の廃止とあいまって、収集家向けの記念コインが増大している。次に代表的なものを挙げる。

- 西ドイツ…1952～79年の5マルク銀貨28種(直径29mm、品位625、11.2g)
1979～86年の5マルク白銅貨15種
ミュンヘン・オリンピック時の6種と1987年以降の10マルク銀貨
東ドイツにも5マルク、10マルク、20マルク記念貨シリーズがある。
- オーストリア…1955～73年の25シリング銀貨20種(直径32mm、品位800、13g)
1959～78年の50シリング銀貨20種(直径34mm、品位900/640、20g)
1975～79年の100シリング銀貨20種(直径36mm、品位640、約24g)
1980年以降の50シリング銀貨(直径38mm、品位640、約24g)

- イギリス…25 ペンス (1 クラウン) 白銅貨と銀貨 (直径 39mm、品位 925、28.3g)
1972 年 (エリザベス II 世銀婚) より 1981 年 (チャールズ & ダイアナ御成婚) までの 4 種
ソヴェリン金貨発行 500 年記念金貨 4 種
- イスラエル…独立記念の 5 ポンド銀貨 (直径 34mm、品位 900、25g)、1958 ~ 67 年の 10 種、10 ポンド銀貨 (直径 37mm、品位 900、26g)、1968 ~ 73 年の 6 種、1962 年より金貨も発行されている。
- その他の国…チェコ、ハンガリー、フランス、アメリカ合衆国などでも発行されている。
- オリンピック…シリーズものは西ドイツのミュンヘン大会 (1972 年) の 6 種銀貨が初めてである。次いでカナダのモントリオール大会 (1976 年) の 24 種銀貨と金貨 1 種と大シリーズ化した。さらにソ連のモスクワ大会 (1980 年) では白銅貨 6 種、銀貨 14 種、金貨 6 種、プラチナ 5 種となった。以降、ロサンゼルス大会 (1984 年)、ソウル大会 (1988 年) アテナ大会 (2002 年) でも発行されている。
- FAO コイン…国際連合食料農業機構 (FAO) が発行を推奨したコインで、158 カ国より 295 種が発行された。コインの大きさ、素材は様々である。
- WWF コイン…ユネスコの協力による世界野生動物基金 (略称 WWF) がその資金の一部となるよう発行したコインである。直径 34mm で 33.4g の金貨、直径 42mm で 30g 代の銀貨、直径 38.6mm で 20g 台の銀貨の 3 タイプのコインが 24 カ国より 1 種類ずつ出された。



(4) ミントセットとプルーフセット

ミントセットとは木暮俊夫氏の「世界のコイン収集」(1985年 ダルマ)によると、「一国の一定の造幣局で、一定の年に鑄造した各タイプコイン一枚宛をセットにしたもの」とある。プルーフ仕上げのミントセットをプルーフセットと呼んでいる。

シービーの英国コインのカタログによると最初のプルーフセットは1826年のジョージIV世の5ポンド金貨からファージング銅貨の11点セットとなっている。しかし、これは造幣局が出したのではなく、彫金氏が私的にだした物のようである。

イギリスには、1839年のウナ&ライオン5ポンド金貨を含む15点プルーフセットなど有名な大物セットが多い。最近では多くの国が、ミントセットとプルーフセットを発行している。我が国はミントセットを1969年(昭和49年)よりプルーフセットを1987年(昭和62年)より発行している。収集対象としては記念貨も組み込まれるフランスやイタリア、1ポンド貨が毎年変わるイギリスが面白い。

(5) オンス物

1980年代後半より、コインとメダルの中間的なものとしてオンス物と呼ばれる金貨、銀貨が各国より発行されている。これは、正

式の通貨ではないが政府が関係して額面を手記して権威付けしているものが多い。デザインの優れているものがあるが、金貨については地金 + a で売買されている物が多く、本当のコインとは別物と考えた方がよい。

金貨では、1 オンス (約 31g)、1/2 オンス、1/4 オンス、1/10 オンスの物が多く、銀貨では5 オンス (約 155g)、1 オンスのものが多い。12 オンス (約 370g) のものもある。

船、SL といったデザイン別収集家、あるいは宝飾用向けである。



日本貨幣の歴史

○飛鳥時代

【富本銭】

我が国では、和銅元年（708）に鑄造された“和同開珎”が最初の貨幣といわれていましたが、現在では、平成11年（1999）1月に奈良県明日香村の飛鳥池遺跡から発見された“富本銭（ふほんせん）”33枚が『我が国最初の貨幣』であるといわれていますが、学者さんでは祝賀銭と見る人もいます。

この“富本銭”は天武天皇12年の683年に鑄造された貨幣で、中国の“開元通宝”をモデルにして造られ、大きさは10円玉（直径23.5mm）より少し大きい直径24mm・重さ3.75g・厚さ1.5mmで、中央に6mm四方の四角い穴があいています。

貨幣の表の上下には「富本」の二文字が刻まれており、この字「富本」とは「国を富まし、民を富ませる本（もと）」という意味です。

○奈良・平安時代

【和同開珎と皇朝十二銭】

“和同開珎”は、最初の政府発行貨幣である。今のところ和銅開珎である事はだれも疑わない事実である。和銅元年（708）、今から1300年前に鑄造された貨幣（重さ一匁＝3.75g）をいい、この鑄造から250年の間に、金貨幣1種類、銀貨幣1種類、銅貨幣12種類が誕生しました。このうち銅貨幣を称して『皇朝十二銭』と呼ばれています。

発行後一年で偽貨が現れた事も判っていて、偽造の歴史が昔からあった事が判る。

その後、豊臣秀吉が金・銀貨幣を造るまでの約600年間、我が国では貨幣の鑄造が途絶えました。

（参考）

金貨：開基勝宝 天平宝字4年（760）

銀貨：大宝元宝 天平宝字4年（760）

皇朝十二銭：

- ①和同開珎（わどうかいちん）
和銅元年（708）
- ②万年通宝（まんねんつうほう）
天平宝字4年（760）
- ③神功開宝（じんこうかいほう）
天平神護元年（765）
- ④隆平永宝（りゅうへいえいほう）
延暦15年（796）
- ⑤宝寿神宝（ふじゅしんぼう）
弘仁9年（818）
- ⑥承和昌宝（じょうわしょうほう）
承和2年（835）
- ⑦長年大宝（ちょうねんだいほう）
嘉祥元年（848）
- ⑧鏡益神宝（にょうやくしんぼう）
貞觀元年（859）
- ⑨貞觀永宝（じょうかんえいほう）
貞觀12年（870）
- ⑩寛平大宝（かんぴょうたいほう）
寛平2年（890）
- ⑪延喜通宝（えんぎつうほう）
延喜7年（907）
- ⑫乾元大宝（けんげんたいほう）
天徳2年（958）

○平安後期・鎌倉・室町時代

【渡来銭（中国銭）の輸入】

平安後期（1100年頃）、主に砂金を輸出し、中国から『宋銭』を輸入して国内に流通するようになりました。

足利時代には、明（中国）と室町幕府の勘合貿易が始まり、大量の『明銭』が輸入されるようになり、特に“永楽通宝”は好まれ全国に広がりましたが、同時に『鏝銭（びたせん）』という粗悪な私鑄銭も出回りました。

○安土・桃山時代

【甲州金・天正長大判・菱大判】

戦国大名（武将）が金・銀貨を発行しましたが、その中でも有名なのは武田信玄が発行した「甲州金」です。

豊臣秀吉が造った最初の金・銀貨は、天正15年（1587）に発行されましたが、特に有名金貨には“天正長大判”・“天正菱大判”（天正16年（1588））があります。“天正長大判”はその名のとおり長さ17.5cmで世界最大級の大判です。

なお、大判の重さは十両（44匁＝165g）に定められ、幕末の万延大判を除き、大判は常に十両の重さで造られていました。故に、大判「十両」の文字が書かれています。従って、大判の十両は量目であって、江戸期貨幣制度における金貨幣単位の十両ではありません。大判は主に、贈答やご褒美用として造られたものです。実質7両強。

この時代、庶民は渡来銭（永楽通宝）や鏝銭を使用していました。

○江戸時代

【慶長大判・小判・丁銀・豆板銀・寛永通宝】

徳川家康が日本で初めて貨幣制度を統一し、貨幣単位を定めて、全国流通を目的とした金・銀貨幣を鑄造しました。

慶長6年（1601）、家康は金座・銀座を設置し金座では金貨の“慶長大判”・“慶長小判”・“一分金”を銀座では銀貨の「丁銀」・「豆板銀」を造りました。

「金貨」は額面のある計数貨幣で、「銀貨」は重さを量って使用する秤量貨幣として流通していました。

なお、慶長14年（1609）に金・銀の交換割合（金一両＝銀50匁）が制定されました。また、銅貨が造られたのは、少し遅れて三代将軍家光の時代で、寛永13年（1636）に錢座が設置され、“寛永通宝”の鑄造が始まりました。

こうして金・銀・銅の三貨制が確立しました。

【元禄の改鑄—江戸幕府最初の改鑄

—品位の引き下げ

元禄8年（1695）に、幕府の財政赤字を補填するために、初めて金・銀貨の品位を減らす貨幣の改鑄が行なわれました。

【享保の改革 品位の引き下げ

→その後、改鑄相次ぐ品位の引き下げ

享保の改革（吉宗時代）により、品位が引き下げられていた元禄時代の金・銀貨を慶長時代の金・銀貨の品位まで戻す良貨政策をとりましたが、その後、文政元年（1818）以降は幕府の財政不足が続く中、新たな財政確保のための貨幣の改鑄による出目（でめ）収入に頼るようになり、江戸末期まで相次いで貨幣の改鑄を重ねていくようになりました。

【ペリーの来航—金貨の海外流失】

アメリカのペリーが浦賀沖に来航し開国を迫ったため、幕府は嘉永7年（1854）、日米和親条約を結ぶことになり、ついで安政5年（1858）6月に締結された日米修好通商条約を締結する前年の安政4（1857）年5月、日米両国貨幣の交換割合等を内容とする日米約定が締結されました。

内容は、当時アジアでただ一つの国際通貨であったメキシコドル（洋銀）と一分銀の交換比率を1ドル＝3分と定めたことです。当時の日本の貨幣制度は1両＝4分＝16朱の四進法であり、また、天保小判は本位貨幣、銀貨は補助貨幣としていたので一分金と一分銀は等価、各4分は1両と交換することがで

当時の国際的な金銀比価は1対15で日本は1対5でした。そこに目をつけた外国商人たちは、まずメキシコドル4枚（4ドル）を一分銀12枚（12分）と交換し、さらにそれを小判3枚（3両）と両替することにより、この小判を外国で売ると、金銀比価の関係で3倍ものメキシコドルを手に入れること出来たため、大量の日本の金貨（小判）が流失していきましました。すなわち、当初の4ドルが3倍の12ドルとなるわけですから、こぞって両替に走った結果、大量の金の海外流失を招くことになりました。

そのため、安政6年（1859）10月、幕府は洋銀と一分銀の交換を停止することを通告しましたが、これは事実上の貿易停止となるのでアメリカ総領事のハリスの勧告に従い、メキシコドルに「改三分定」の刻印を打ち、広く国内に通用させるようにする一方、日本の金銀比価が国際水準に比べ不当に低いことが海外流失を招くことになっていると指摘し、金銀比価を国際水準まで引き上げること

をも勧告しました。その結果、万延元（1860）年に“万延小判”等の改鑄を行い、金の純量を1/3に引き下げ、国際水準に合わせることによって海外への流失は止まりました。

一方、我が国の貨幣制度は、幕府の度重なる貨幣の改悪・改鑄により、また、各藩が発行する藩札や藩内限り流通の貨幣の発行や偽造貨幣・私鑄銭等の流通もあり、びん乱の極みに達していました。また、経済的には物価騰貴を引き起こし、国民の不満をかきたてることとなりました。

【近代造幣工場の建設に向けて—改税約書】

このように乱雑を極めた貨幣制度は、欧米人たちにも被害を及ぼす状況にもなり、欧米各国の総領事達は、こぞって幕府に貨幣制度の整備を迫ったため、慶応2年（1866）、米・英・蘭・仏の四カ国と幣制を整備する旨を約する『改税約書』を結び、近代造幣工場の建設を約束しましたが、当時の幕府にはその履行を期待すべきもなく、この約束は明治新政府に引き継がれました。

○明治時代

【貨幣司・・・つなぎの官署】

幕府が大政奉還したあと、造幣局が出来るまでの間、つなぎの官署として「貨幣司」が設けられ、ここで“二分金”・“一分銀”などを鑄造しましたが、明治2年（1869）2月、太政官に「造幣局」を設置、「貨幣司」は廃止され、金座・銀座の灯も消えることになりました。

【造幣工場の建設】

造幣局の建設工事は、香港造幣局の機械（慶応4年（1868）機械一式を6万両で購入）が到着するのを待って、明治元年（1868）11月、敷地5万6千坪（約18万5千㎡）の広大な大阪・川崎の地で開始され、明治3年（1870）8月に超近代的な造幣工場が完成しました。

【明治創業期 新貨条例】

明治4年（1871）4月の創業式典を終えたおよそ3ヶ月後の6月に、我が国最初の貨幣法規『新貨条例』が制定され、『金本位制（金1.5gをもって1円とする）』のもと、その定められた規格に則り、純正画一な金銀貨幣の製造を開始しました。

◎新貨条例の内容（13種類）

位貨幣：20円、10円、5円、2円、1円の5種類の金貨幣と貿易用の1円銀貨幣

補助貨幣：50銭、20銭、10銭、5銭の銀貨幣と1銭、半銭、一厘の銅貨幣

この結果、旧貨幣の回収が大いに進み貨幣に対する内外の信用は急速に高まり、近代国家としての貨幣制度が築かれていったのです。

【明治中期 貨幣条例】

明治30年3月、『貨幣法（金0.75gをもって1円とする）』が公布され、本位貨幣を廃止し、名実ともに『金本位制』の貨幣制度が確立しました。

○大正時代

【大正期】

第一次世界大戦（1914～1918）による経済の好景気を反映して、貨幣の需要も著しく増加し、造幣事業は非常な活況期を迎えることになりました。一方、明治40（1907）年代に実現した動力の電化を受けて、溶解技術に画期的な改革が行なわれるなど、「技術革新の時代」と呼ぶに相応しい時代を迎えましたが、第一次世界大戦の進行とともに我が国は、金輸出を禁止した結果、『金本位制』を停止するところになり、大正9（1920）年以降金貨の製造を休止しました。

○昭和時代

【昭和前期 臨時通貨法】

昭和5（1930）年、金融恐慌に苦しむ財政の建て直しのため、金輸出の解禁（金解禁）の措置が取られましたが、運悪く世界は金融恐慌の真っ只中であり、また翌6（1931）年に満州事変が勃発したため、12月に入り「金輸出の再禁止」が布告され、『金本位制』が完全に停止したため、再び金貨幣の製造は中止となり、以降、我が国は『管理通貨制』への第一歩を踏み出すことになりました。

その後、戦時体制強化とともに銀地金も不足はじめた結果、銀貨幣の製造も不可能となり、ここにおいて『貨幣法』による金・銀貨幣の製造は全て出来なくなりました。そして、戦争の拡大とともに昭和13（1938）年6月に公布された『臨時通貨法』による補助貨幣の製造が開始されました。

【昭和後期～平成期 新貨幣法】

第二次世界大戦後（1945～）は、経済の復興期・高度成長及び安定成長期における経済状況、流通業界の動向及び、自動販売機などの普及によって、貨幣需要にもおおきな変化が起こり、その結果、昭和62（1987）年6月の『通貨の単位及び貨幣の発行等に関する法律（いわゆる新貨幣法）』が制定され「金」と「円」のリンクを廃止し『管理通貨制度』に即した法整備が行なわれ、今日に至っています。

この資料は、『独立行政法人 造幣局』東京支局様のご好意によりご提供戴き、引用させて頂きました。